

# ラオス シェンルアン村の織物調査報告

やなぎ  
柳

(注1)  
よし  
悦 州

## はじめに

沖縄県立芸術大学附属研究所は、1991年よりラオスの民族文化調査研究を継続して行っている。この研究はラオスの民族文化を調査研究し、両国研究者の学術交流を深め、各々の国の文化について理解を深めようとするものである。柳は、1991年よりラオスの染織文化について予備調査を含め2回の調査研究を行ってきた。1993年1月には沖縄県立芸術大学附属研究所はラオス国社会科学学院との間に協定を締結した。<sup>(注3)</sup>この協定に基づき、1993年12月22日から1994年1月7日まで、第2回ラオス民族文化調査を実施した。<sup>(注4)</sup>今回の調査では、ラオスの織物について特に集中して調査を行った。中でも、ラオス東北部シェンルアン村では、さまざまな点で特に注目すべき事柄を調査することができた。本論文はシェンルアン村で調査し得た事柄について記述したものである。

## 調査概要

ラオス人民民主共和国（以下ラオスと記す）はインドシナ半島内陸部に位置する。ラオスの国民は、ラオ族をはじめとして、65以上に及ぶ山地少数民族から構成されている。トムペット・キンサダ博士によれば、<sup>(注5)</sup>ラオスの人口は約450万人であり、ラオタイ語族が56%、モンクメール語族が34%、シナ・チベット語族とモン・ヤオ語族が合わせて9%に大別できる。これらの諸民族は各々の文化を互いに尊重しながら国家を形成しているところにラオスの特徴がある。

筆者らは、1993年12月22日から1994年1月7日まで第2回ラオス民族文化調査を行った。日本側の調査メンバーは、柳・久万田・片岡の3名であった。<sup>(注6)</sup><sup>(注7)</sup>今回の調査でのラオス側受け入れ先は、ラオス国情報文化省文化調査研究所<sup>(注8)</sup>であった。同所副所長のカンペン・ケタヴォング氏と面会した。同氏は、ラ

オスの染織の中でも特に織物の模様が表す民族的な意味について、専門に調査研究されている。今回の調査研究が織物を中心に計画されていることから、筆者はカンペン氏に調査の同行を依頼した。

調査によって採集した単語は、本文中ではカタカナで表記した。単語には(単1)などと記し、文末に単語対照表として、その番号の単語をラオ語と国際音声記号(IPA Kiel)<sup>(注9)</sup>を列挙して示した。ラオ語とIPA Kiel表記は共同研究者であるトムペット博士の協力によるものであることをここに記し、感謝を表す。

図1に調査地域の概略図を示す。調査は、ラオス中央部シェンカン県の県都ポーンサワン周辺とラオス東北部ホアパン県の県都サムヌア地区を中心に行った。シェンカン県では、絨織物と植物染料による染色の調査を計画した。1991年の調査では、シェンカン県ポーンサワンを中心に行っていたが、今回はその調査をさらに深めるため、同じ集落を再び訪れ調査するよう計画した。またサムヌア地区は、ラオスでは代表的な織物産地であり、かなり辺境の地であることから、伝統的な織物を調査できるであろうと予想し調査地として選んだ。サムヌア地区は、ラオス東北部に位置し、ベトナム国境まで70kmほどの山間の町である。

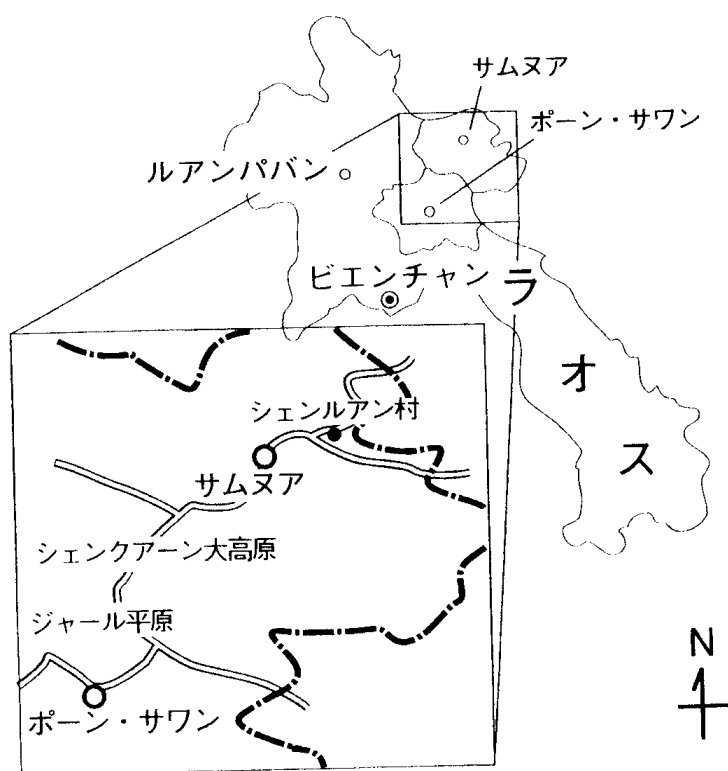


図1 調査地域の概略図

ラオスの首都ビエンチャンから飛行機でポーンサワンへ移動し、同地で4輪駆動車を借上げた。ポーンサワンからサムヌアまで170kmの距離であるが、2000m級の山々を擁す

るシェンクアン大高原を越えていく必要があり、想像以上の難路であった。サムヌア地区では、およそ20箇所調査活動を行うことができた。

## シェンルアン村概要

1993年12月29日、筆者らはシェンルアン村を訪れた。シェンルアン村はサムヌアより37km東北の方向にある。同村の民族はタイカウ族であり、66戸約450人が居住している。シェンルアン村付近では、サムヌアから東へ向う道の北側は石灰岩質の小高い丘が連なり、

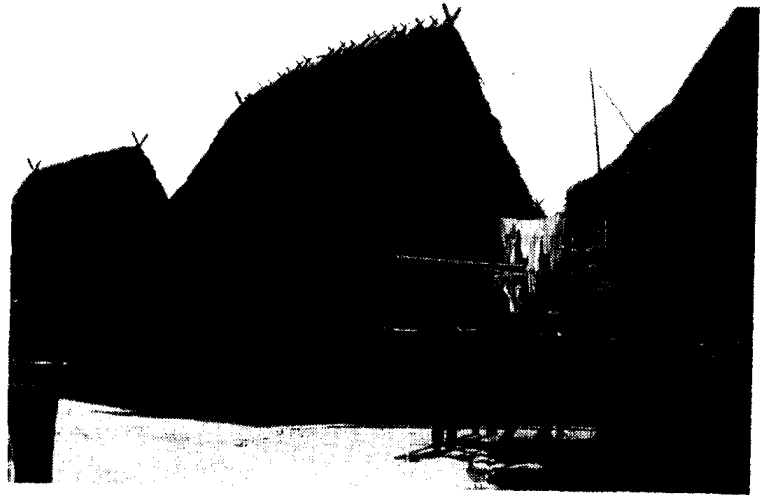


図2 シェンルアン村の家

り、南側には幅500～800mほどの水田が広がっている。道の南側には幅1mほどの小川が流れていた。村の西端には、サムヌアからの道から南に枝分れし、小川を渡り村の中央に通ずる道がある。シェンルアン村は本道の南側に接し、村の中央を通る支道の両側に点在する家々からなっていた。

図2に村の家の外観を示す。村の家はすべて高床式であった。屋根は藁葺の急勾配であり、壁は板壁であるものが大半であった。家々は規則的に配置されていないが、屋根の棟は東西に向けて作られていた。家は小さいものは正方形であるが、大きい家は東西方向が長く作られていた。東側か西側に竹製のテラスが作られ、ここから家に出入りする構造であった。北側の山から水をパイプで引いた水場が村の中央を通る道の2カ所設けられて、常時水が流れ出ている。村の中心のやや東側で道の南側に、この村の長の家があった。

この村での調査は、3つの部分に分けることができる。

1. 整経作業と木綿の綿花より製織までの作業
2. 経二重組織織り（ムック）調査
3. シェンルアン村の織物に関する悉皆調査

## 調査内容

### 1. 整経作業と木綿の綿花より機織までの作業

#### 1-1 整経

図3、4にシェンルアン村(単1)での整経(単2)作業を示した。整経を行っていた家は、<sup>(注10)</sup>他の家比べて床下が高く、2m程度あった。図3の左側に2本、右側に1本の木製の棒が地面に打込まれていた。図4の奥には折返しのために同様の棒が打込まれていた。手前の棒と奥の棒との中間には、ドラム缶が置かれて整経中の糸が地面に着かないよう高さを調整してあった。

整経作業は、図3の左側の棒に立てかけてある管立(単3)を使い行う。管に巻いた木綿糸を4本セットした管立を手にとって歩き、4本の糸を同時に木の棒にかけて整経を行っていた。図3左側の2本の棒に4本ずつ8の字状に糸をかけてあぜを作っていた。すなわち、4本あぜで整経していたことになる。この4本を整経の最小の基本単位としてホン(単4)と呼ぶ。あぜの先には1cm程度の幅に裂いた布で数あぜが取ってあった。数あぜの単位はロップ(単5)という。整経糸80本で1ロップである。4本一単位の経糸を、図4左側の棒と右側の棒との間で10往復すると、80本の糸が整経できたことになる。この80本を1ロップとして、整経及び箆における経糸の総本数を考える単位

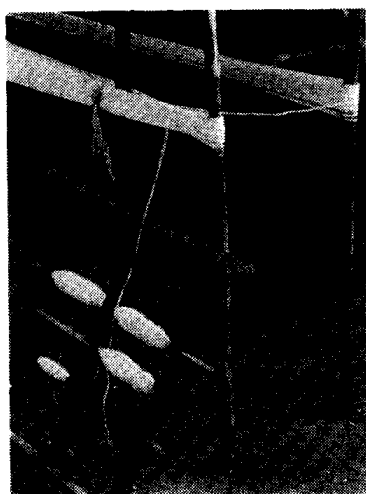


図3 整経用管立と  
整経用の棒



図4 木綿糸による整経作業

として使っている。<sup>(注11)</sup>この村では箒自体をフーム（単6）と呼ぶが、箒の総羽数の単位にもフームを使う。即ち、経糸80本分は箒の40羽分であるが、経糸80本（1ロップ）を通すことのできる箒羽の単位を1フームと呼んでいた。また、1ロップは1カン（単7）とも呼ばれる。整経時に整経用の管立にセットする管の本数は、4本以外には、8本あるいは10本の場合がある。整経長は12尋（単8）であった。<sup>(注12,13)</sup>

## 1-2 木綿平織り

整経を調査した家の南側の床下では、少女が木綿布を織っていた。使われていた木綿糸（単15）の太さは、目測で5番手（英国木綿番手）程度で、経糸（単16）・緯糸（単17）共に単糸であり糊がついていた。布幅は約40cmであった。

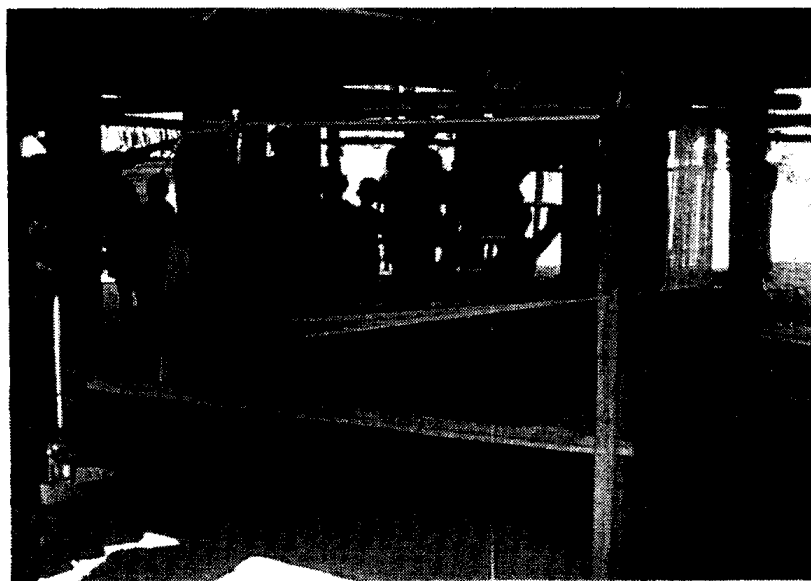


図5 木綿平織作業

図5に、機の全景を示す。機（単18）構造は基本的に1991年の柳によるポーンサワン近郊での染織予備調査<sup>(注2)</sup>と同じであった。経糸は経糸巻具に巻かれず、剣先部から機の上方を通り、次第に束ねられて織り手の上で機の横部材に結わえられる。この機の地面に対する経糸の角度はより大きく、織り手の前方方向（図5右側）が高くなっている。経糸の角度が大きい傾向は、後述のこの村の悉皆調査時に調査した機全般で見ることができた。

一定の長さに布を織ると経糸をゆるめて布を布巻具（単19）に巻取る必要がある。次に、経糸を経糸固定部分で、輪を作り20cm程度の長さの細棒をその輪に入れ、経糸を棒にからげるようにして結び目を作り固定する。さらに、経糸を引張って張力を加え、結び目を動かして張力を調整していた。

### 1-3 木綿糸紡ぎ作業

木綿糸紡ぎ作業はナンエー夫人（単20）のテラスで見ることができた。ナンエー夫人の家は図11の地図中で8の家である。同夫人の家は、村の長の家の道路を隔てた北側であり、水場に近接している。家の東側に竹製のテラスがある。その上には機が1台あり、残りの空間では村の婦人たちが3名ほど集って木綿糸紡ぎ行程を行っていた。

テラスの一角には、直径1mほどの平らなざるに綿花が山盛にされていた。その隣では、綿繰り作業が行われていた。綿繰り器は、沖縄で使われていた形に近似のものであった。糸車（単21）による糸紡ぎ作業は、ゆっくりとしたリズムで進められる。錘より1mあまり常時紡がれた糸が伸びており、20cm程度新しく糸が紡ぎ出されると、新たに紡がれた長さの分だけ小管に巻込むという作業が続けられていた。糸巻き作業は、黒く染色された木綿糸を管に巻き取る作業であった。

## 2. 経二重組織織り（ムック）

ナンエー夫人の家では、ムック（単22）と呼ばれる経二重組織織り（以下ム

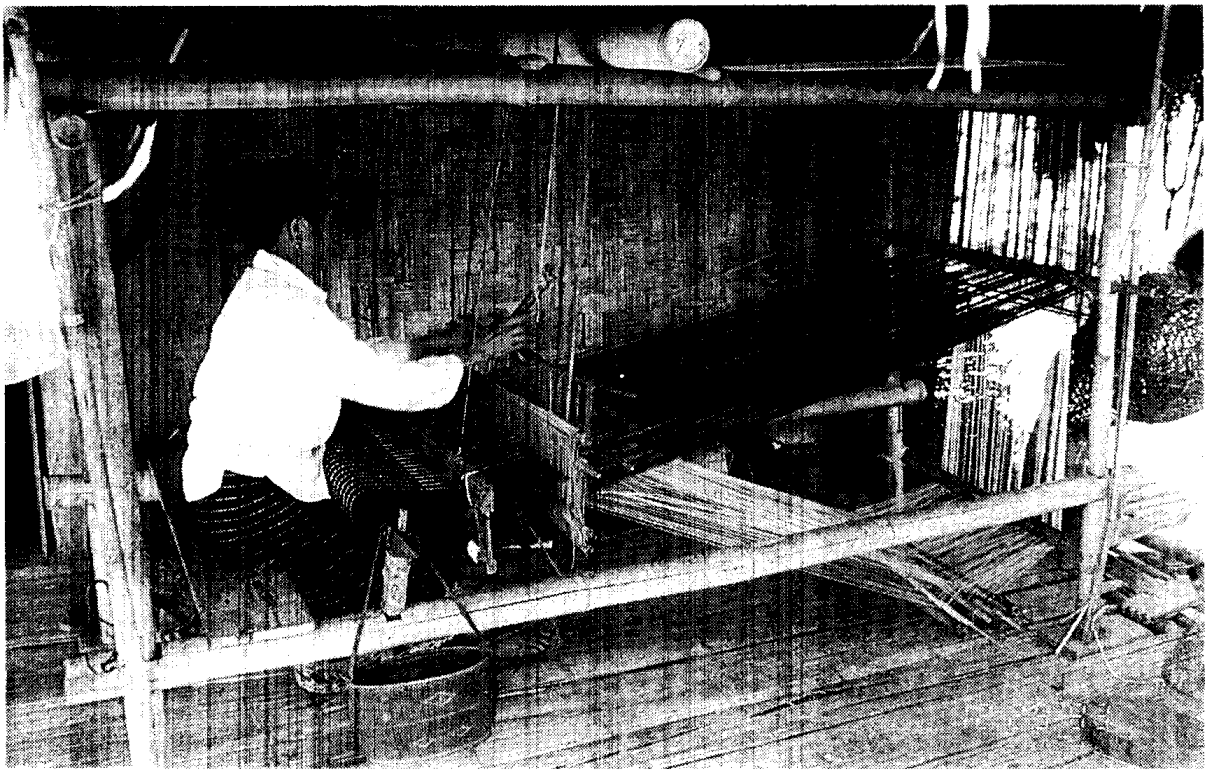


図6 ナンエー夫人のムック織り作業

ックと記す)について調査した。ムックの経浮き糸張力の調整方法にこの機の特徴がある。

ムック機の全景を図6に示す。部材は竹でできていた。平綜統は機の上に乗った直径10cmあまりの丸竹に掛けた紐から釣り下げられていた。箎とフック(単23)は、機の上に載せられた竹製の天秤棒から釣り下げられていた。<sup>(注14)</sup> 機の幅は88cm, 高さ143cm, 奥行は225cmであった。座板(単24)は木製の平板であった。

経糸は地糸と浮き糸で構成されている。経糸はこの村で栽培されている琉球藍<sup>(注15)</sup>(単25)で黒に近いほど濃く染色された40番双糸程度の紡績木綿糸と、付近の山で採集できる天然のラックダイ(単26)で濃い赤に染色された200dほどの絹糸(単27)で経縞を構成してあった。経浮き糸も200dほどの絹糸で、わずかに黄色味をおびた無染色絹糸であった。経糸は米を煮た糊で軽く糊付されていた。

地経糸には、図6の左より右方向に向って、箎、平組織のための2枚の番目<sup>(注16)</sup>(つがいめ)構造の平綜統(単28)に通されている。箎には2本ずつ地経糸が通されていた。浮き糸部分では、地経糸2本と浮き経糸2本の合計4本の経糸が一つの箎目に通されていた。箎密度は、実測で8羽/cmであった。4枚の浮き糸用の輪状綜統<sup>(注16)</sup>(単29)は図6の番目綜統の右側に置かれている。それらは、地の経糸の上にただ置かれているだけであった。経地糸は図6の左より右方向の剣先部分へ向けて、上方向に張られている。布巻具の床からの高さは59cm, 剣先部分の経糸の高さは94cmであり、地経糸は35cm 剣先部分が高くなっていることになる。

浮き経糸は、地経糸に対し下方、剣先部分の床方向に向って張られている。

図7に浮き経糸の張力調整部分を示す。浮き経糸の剣先部分には張力調整用の棒(単30)が経糸の上に置かれている。その棒の真下

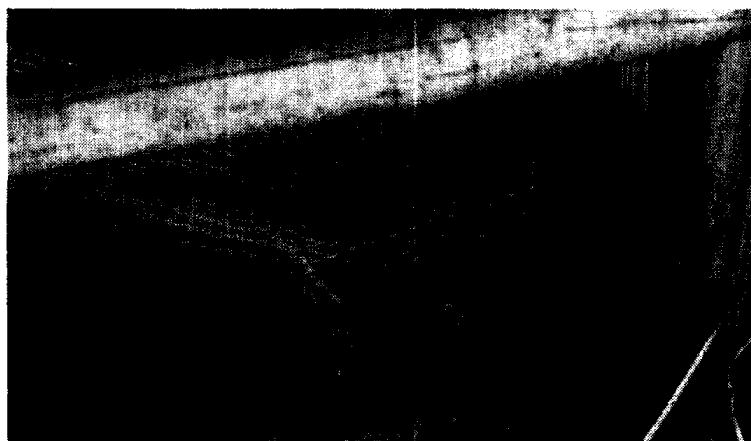


図7 浮き経糸の張力調整部分

に同じ長さの張力調整用重りが置かれ、棒の両端部分で連結されている。4種の浮き経糸はそれぞれ4組の張力調整棒の重りによって独立した張力を保っている。機の上部より木製のフックがつり下げられている。経浮き模様に応じて、4枚の浮き糸用綜統を一枚あるいは組合わせて選び、フックに引っかけて持上げることにより、経浮き糸が持上げられ開口されることになり、模様を織り出すことができる。浮き糸用綜統が持上げられていない状態では、張力調整用棒で浮き経糸は地経糸より下方に位置しているため、地綜統の開口時には、緯糸によってすくい上げられることがない。4組の張力調整用重りの一部は床にわずかに触れており、必要以上の張力が浮き糸にかからないように調整されていた。浮き糸用綜統の操作はフックに引っかけるだけにもかかわらず、口開きも良く簡単に織り進むことができる。踏み木（単31）は竹製で2本あり、右足だけで交互に踏んで操作していた。

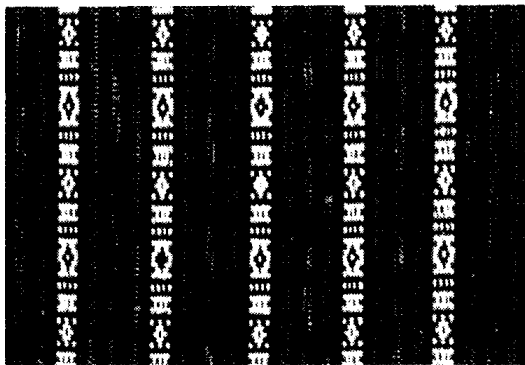


図8 ナンエー夫人の織ったムック布1

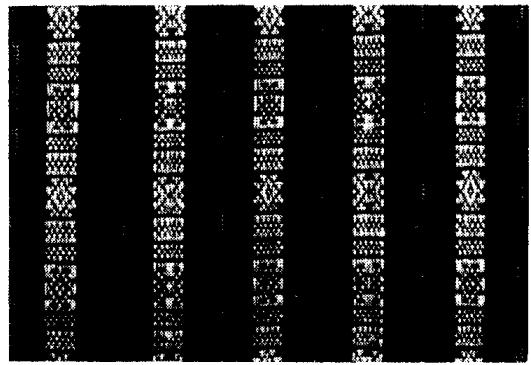


図9 ナンエー夫人の織ったムック布2

図8, 9にナンエー夫人の織ったムック布を示す。共に基本的な糸使い、色使いは共通であり、経地糸の一部に簡単な経緞が挿入されている。図10も同様にナンエー夫人のムック布であるが、花を模様化し緯糸の浮き模様も入った、より大胆な浮き模様（単32）が使われている。

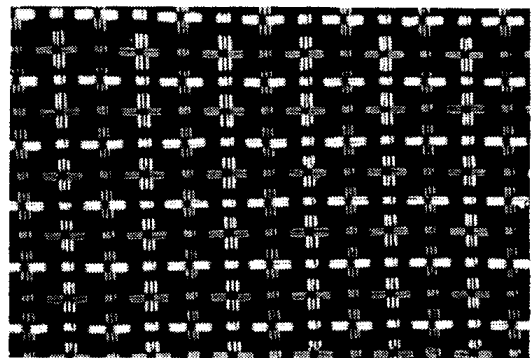


図10 ナンエー夫人の織った花十字模様ムック布



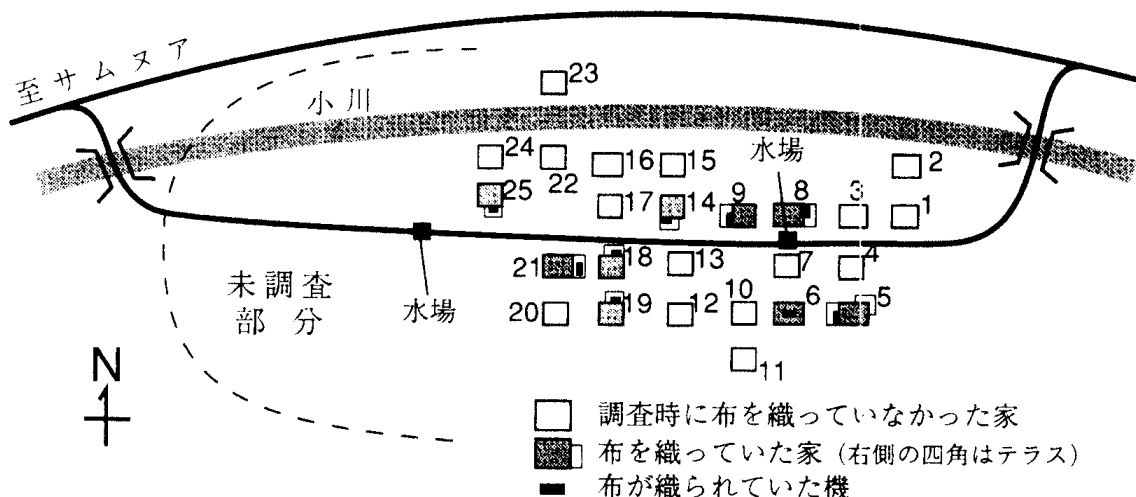


図11 シェンルアン村の配置図

### 3. 悉皆調査

シェンルアン村全66戸のうち約4割(25戸)の織物状況について、簡単な悉皆調査を行った。調査は、村内での家の位置、家の中で機の置かれている場所、現在布が織られているかどうか、織られている織物の種類・技法等についてであった。

(注17)  
図11にシェンルアン村のうち、調査した25戸の配置を示す。家の配置は四角で表した。調査時に機を見ることができなかつたり、機があるものの織物が織られていなかった家は白い四角で表した。調査時に織物を織っていた家は灰色で表し、機の位置を黒い四角で示した。機が家のテラスに置いてある場合は、テラスの位置も示した。

調査は、村の東端から順に行った。図11の家の番号は調査を行った順に機械的に付けたものである。以下に調査時点における家々の調査概要を番号順に記す。

1. 東端のこの家では現在織物を織っていない。<sup>(注18)</sup>農繁期が終れば織物を再開する。外部から機の存在は確認できなかった。
2. 10日前まで床下で織っていたが、機を見ることができなかった。床下の高さは2m程度。新しく建てた新しい形式の家であった。<sup>(注19)</sup>
3. 3日前まで床下で織っていた。しかし、現在は製材された材木が床下に運び込まれていた。
4. 3カ月前まで織っていた。農作業が終了しだい織り始める。機は確認でき

なかった。家の壁は竹の網代でできている。床の高さは90cm程度で西側に床より20cm低いテラスがあり、その場所で織物作業が行われる。

5. 家の東側と西側にテラスがある。東側のテラスでは、糸巻き作業が行われていた。西側のテラスでは、織物が織られていた。西側のテラスには、北西側から竹製の梯子で登ることができる。そこは、竹を割って平らに延したテラスで、大きさは南北に5m、東西に3m程度であった。機は、軒下に南に向って置かれていた。

機には、紋綜統（単33）があり、シンと呼ばれるラオスの女性用民族衣装の裾模様のための細幅の帯布を織っていた。織り技法は緯浮縫取織<sup>(注20)</sup>であった。材質は経緯糸共に木綿糸、経糸は黒色、浮き糸は駒よりで刺繍用の化学染料染め絹糸を使用していた。剣先にはあぜ棒があった。織り幅は22cm 布幅20.5cm、紋綜統の長さ77cm、紋竹（単34）の本数は26本、フォーム7<sup>(注21)</sup>、機は木製。

別に、機の後部に、箴と地綜統紋綜統が置かれていた。箴幅は75cm、フォーム17。

6. 床下は高く2m程度、整経と木綿織りを調査した家。3ヶ月前には5台の機があった。現在は2台の機があり、1台だけで木綿布が織られていた。木製の機、通し幅41cm、布幅39.5cm、経緯糸共に糊付されていた。床下中央部分に機が置かれていた。
7. この村の長の家。北側にテラスがある。以前には2台の機を置いていたが、現在では南側の6の家の床下で織り作業をしている。
8. 午前中経浮き織り（ムック）の調査を行ったナンエー夫人宅。東側のテラスに1台の機。機は竹製で、箴の通し幅78cm、布幅74cmであった。
9. 南側と西側にテラスがあり、西側のテラスで機織りをしていた。裾帯布を織っていた。木綿経緯糸で織技法はチョークであった。経糸の箴通し幅21cm、布幅20cm、フォーム7、紋綜統長さ86cm、紋竹12本で、剣先部にあぜ棒があり、竹製の機であった。
10. 6の床下で普段は織っているが今は片づけてない。
11. 10と同様に6の床下で織るが今はない。
12. 9月までは織っていた。現在、機は片づけられていた。

13. 現在は織られていなかった。機も見ることができなかった。
14. 南西の角にテラスがあり織り作業が行われていた。木綿の経緯糸でチョーク技法で裾帯布を織っていた。通し幅 20cm, 織り幅 19cm, 紋綜統長さ 80cm, 紋竹は 25 本であぜ棒があった。箴密度は実測 12羽/cm で、機は木製であった。
15. 機は横部材を取外し、両側の構造だけが重ねられた状態でテラスの家側に立てかけられていた。材質は竹製であった。
16. 南側東端に狭いテラスと家の西端に広いテラスがある。機は西端のテラスにあるが、調査時には糸は準備されてはなかった。3 日前まで織っていた。
17. 機道具があり、木綿糸を紡いでいた。しかし、機は片づけられていた。
18. 北東の角のテラスで西向きに機が置かれていた。経糸は黒色木綿、緯糸は赤く染色された木綿糸で、通し幅 80cm, 布幅 75cm であった。布の右端には 24cm 幅でチョーク技法による裾模様が織られていた。紋綜統長さは 109cm, 紋竹 11 本, あぜ棒あり。紋綜統は経糸全体の幅にセットされていたが、紋竹は右端の模様部分にのみ入っていた。木製の機で布幅が広い。機の上に乗っている紋綜統と箴を吊り下げている棒は、竹製の天秤棒が利用されていた。
19. 北東の角に西向きに織り機があり、格子を織っていた。経緯糸ともに木綿手紡糸で糊付されていた。平綜統のみ使用し、通し幅 75cm, 布幅 72cm で、あぜ棒があり格子を織っていた。木製の機で、機の形式が少し異なる。天然染料によって染色された糸を使っていた。
20. 1 カ月あまり織られていなかった。
21. 東側テラスで織り作業が行われていた。通し幅 75cm, 布幅 70cm で右側 27cm にチョークによる浮き模様が織込まれていた。右側 38cm 幅に紋綜統が置かれ、その長さは 80cm で紋竹は 13 本であった。あぜ棒があり、経緯糸は木綿、浮き糸は絹で緑色地のシンを織っていた。東側テラスで織り作業は行われていたが、テラスに直接登る梯子はなく、西側から家の中を歩いて東側のテラスに行った。木製の機であった。
22. 東側テラスで機はあるが織られていない。木製の機で、機道具（認め、管巻、綿繰り器）がテラス上に見ることができた。

23. 家の北東側の床下に機が置かれていたが、織られてはいなかった。
24. 3カ月前まで織っていた。西角の床下に2, 3日後に機を組立てる予定であった。
25. 南東側のテラスで織り作業が行われていた。木綿黒経緯糸で、緯糸は2本引きそろえであった。裾帯布が織られており、通し幅は31.5cm, 布幅27.5cm, 紋綜統長さ78cm, 紋竹19本で、あぜ棒が剣先部経糸に置かれていた。経糸の最終部分が見られた。絹の浮き糸でチョーク技法であった。経糸密度は8羽/cmであった。経糸密度が少なく、緯糸を2本引きそろえにして、調整していた。紋綜統の材料糸は、手紡の強撚糸と考えられる。木製の機であった。

## 最後に

整経の方法と、経糸の本数単位について調査できたことは幸運であった。経と算(ヨミ)の関係は大変興味深い問題である。経二重組織織り(ムック)技法の浮き糸用綜統とフックの利用は一般に行われていると考えられるが、ナンエー夫人の機のように、張力調整用の重りを利用しているものは初めて見ることができた。

悉皆調査を行ったことによって、村全体としての織物のあり方やナンエー夫人及びムックとの関係について、調査当時の状況が明らかになった。調査時、実際に布が織られている家は、25戸中9戸であった。しかし、調査時に布が織られていない家でも、一年を通じて全く織物作業を行わない家はなかった。ごく最近まで織られていたり、近日中に織り始められる家がすべてであった。ちょうど調査時は、農繁期の最後であったが、農繁期と農閑期があり、織物も密接に関係していることが判り興味深かった。

ラオスの織物調査研究は、まだ開始したばかりであり、研究課題が沢山ある。本報告は、調査当時(1993年12月29日)のシェンルアン村の状況を記録しまとめたものであるが、シェンルアン村の年間の生活と織物の関係、この村と近隣の村との比較研究など、興味は尽きない。さらに調査研究を継続していきたいと考えている。

最後に、今回の調査にあたって終始協力して頂いたカンペン氏、更にナンエー夫人をはじめとして調査に快く応じてくださったシェンルアン村の人々に厚く感謝致します。

## 注

- 注1 本学附属研究所助教授，専門分野は染色織物。
- 注2 本学附属研究所紀要に『柳 悦州「ラオス染織予備調査報告」，沖縄芸術の科学，1992，第5号，p25-42.』として報告した。
- 注3 初回は1991年9月に柳・内田るり子（民族音楽学）・比嘉政夫（社会人類学）が予備調査として，2回目は1993年1月に柳・加治工真市（言語学）・比嘉政夫（社会人類学）・金城 厚（民族音楽学）・久万田晋（民族音楽学）が協定締結と第1回ラオス民族文化調査として，同国を訪れ調査研究を行った。今回は3回目として，柳・久万田・片岡の3名が第2回ラオス民族文化調査を行った。
- 注4 正式名称は「沖縄県立芸術大学附属研究所とラオス国社会科学委員会との間の学術交流に関する協定書」。
- 注5 ラオス民族文化調査研究の共同研究者，ラオス国文化情報省，言語学博士。1993年10月本学附属研究所は本学芸術振興財団の助成を受け，トムベット・キンサダ博士を本学に招聘し，共同研究を行った。
- 注6 本学附属研究所講師，専門分野は民族音楽学。本調査では，全日程を通じて映像記録を担当した。
- 注7 本学美術工芸学部非常勤講師，琉球大学教育学部助教授，専門分野は織染。
- 注8 ラオス情報文化省文化調査研究所はラオス国総理府社会科学委員会から組織と名称が変更されたが，研究スタッフ及び業務に変化はない。
- 注9 「箴」など日本語表記の方が判り易い場合には，日本語で記述し，箴（単10）などと記述し，括弧内に文末の単語対照表の番号を記入した。
- 注10 整経を調査した家は，図11の地図中で6で記した家である。
- 注11 日本の場合，この単位を算（ヨミ）という。沖縄の場合，伝統的には経糸80本で1算である。
- 注12 サムヌアの市場でシェンルアン村で織られていたものと類似している木綿布を購入したが，購入時の長さの単位も同じ「尋」であった。

- 注13 体を使った長さの単位について。1尋は2キーン（腕の長さ，単9）である。1尋は4ソック（前腕の長さ，単10）と呼ぶ。5本の指を伸した状態で，親指の先から中指の先端までの長さを1クップ（単11），親指の先から人差指の先端までを1キープ（単12），人差指の先端から付け根までの長さをニュー（単13）あるいはデュー（単14）と呼ぶ。
- 注14 この村では，竹製の天秤棒が箆や紋綜統を吊り下げるために多く利用されていた。天秤棒は，長さが1メートルあまりの竹製で，両端に向って細くなり，両端部分は塊状になっていた。
- 注15 調査地では，琉球藍（きつねのまご科 *Strobilanthes flaccidifolius* D.C.）とインド藍（まめ科 *Indigofera tinctoria* L.）の2種類を使い分けていた。注2参照
- 注16 「番目綜統」，「輪状綜統」の名称は『吉本 忍「手織機の構造・機能論的分析と分類」，国立民族学博物館研究報告，1987，12巻2号』に基づいた。
- 注17 この図は片岡の図を基に，柳が加筆したものである。
- 注18 農繁期は4～12月までであり，水田での稲作作業が主体となる。一番忙しい稲の刈入れ脱穀期は10～12月であり，今回の調査時期は，脱穀の最中であった。この調査時期頃から4月までは織物作業が盛んになる。織物に適した季節は乾期であり，9～10月にかけては，蚕を育てて絹糸を繰ったり，植物染料による染色が行われる。11月は刈入れを行う。12月は米の脱穀と乾燥時期で，畑では香菜やタマネギなどを作り始める。家の構成メンバーの多少によって，一年を通じて織物を織る家と，農閑期にだけ織物を織る家がある。調査時は，農閑期にだけ織物を織る家にとっては農繁期の最後であり，織物準備開始の時期にあっていた。
- 注19 この村の典型的な家は，急角度の藁葺屋根，壁は厚い板を縦に使用してある。2の家は，新しく建てられたもので，緩い勾配の板葺の屋根，壁板は，薄く機械引きの板を横方向に使用して建てられていた。この形式の家は，25戸の調査中2戸あった。
- 注20 チョークという。平組織を基本として，模様用には地糸より太めの色糸を緯縫取糸に使い，部分的に浮き組織を織込みながら模様を織り出していく。縫取糸を浮かせるために，長さの長い紋綜統がこの村では利用されていた。紋綜統機の詳細については，注2の論文で報告した。

注21 1 フームは経糸 80 本分の箴羽 40 羽であるから、フーム 7 の箴の総箴羽数は 280 羽になる。箴には、一目で判るようにフームの数字が大きく書かれているものが多かった。

## 単語対照表

日本語	ラオ語	国際音声記号 (IPA Kiel)
1. シェンルアン村	ບ້ານຊຽງລວງ	[ba:nʌsian-ɭuan-ɿ]
2. 整経	ເຜືອ	[fua:ɿ]
3. 整経用管立	ຄໍ້ນຫຼັກ	[khonʌhu:k-ɿ]
4. 経糸4本の単位 (ホン)	ຫົນໜຶ່ງ	[honʌnuwŋ-ɿ]
5. 経糸80本の単位 (ロップ)	ຫລົບ	[lop-ɿ]
6. 筈	ຝິມ	[fu:m-ɿ]
7. 経糸80本の単位 (カン)	ຂັນ	[khan-ɿ]
8. 一尋の長さ単位	ວາ	[wa:ɿ]
9. 腕の長さ単位 (半尋)	ແຂນ	[khe:n-ɿ]
10. 上腕の長さ単位 (1/4尋)	ສອກ	[sɔ:k-ɿ]
11. 親指から中指までの長さ単位	ຄືບ	[khu:p-ɿ]
12. 親指から人差指までの長さ単位	ຄືບ	[khi:p-ɿ]
13. 人差指の長さ単位	ນິ້ວ	[niw-ɿ]
14. 人差指の長さ単位	ດິ້ວ	[diw-ɿ]
15. 木綿糸	ຝ້າຍ	[fa:j-ɿ]
16. 緯糸	ຮິນ	[hu:n-ɿ]
17. 機	ກີ	[ki:ɿ]
18. 経糸	ຄືອຫຼັກ	[khuarʌhu:k-ɿ]
19. 布巻具 (おまき)	ໄມ້ກຳຝັນ	[majʌkam-ɿphan-ɿ]
20. ナンエー夫人	ນາງແອ	[na:ŋ-ɿʔe:ɿ]
21. 糸車	ຫລາ	[la:ɿ]
22. ムック (経二重組織織り)	ມຸກ	[muk-ɿ]
23. 浮き糸用綜統のフック	ໄມ້ຂໍ່ມຸກ	[majʌkhu:ɿmuk-ɿ]
24. 座板	ໄມ້ເຢັນກີ	[majʌpe:nʌki:ɿ]
25. 琉球藍	ຫ້ອນໃບໃຫຍ່	[hɔmʌbaj-ɿnɿaj-ɿ]
26. ラックダイ	ຂີ້ຄິງ	[khi:ɿkhan-ɿ]
27. 絹糸	ໄໝ	[maj-ɿ]
28. 平綜統	ເຂົາ	[khaw-ɿ]
29. 浮き糸用ムック綜統	ເຂົາມຸກ	[khawʌmuk-ɿ]
30. 張力調整用棒	ໄມ້ນາຍມຸກ	[majʌna:pʌmuk-ɿ]
31. 踏み木	ໄມ້ຢຽບຫຼັກ	[majʌjɿepʌhu:k-ɿ]
32. 花十字模様デザインの名前	ຜ້າກ້າງດອກໄມ້	[pha:ɿka:ŋʌdɔ:kʌmaj-ɿ]
33. 紋綜統	ເຂົາຢັງ	[khawʌjaŋ-ɿ]
34. 紋竹	ໄມ້ດິ້ວ	[majʌdiw-ɿ]